

海外研修報告書

北井聡子(ロシア・東欧)

2014年2月23日～3月10日にかけて「卓越した大学院拠点形成支援補助金」の支援を受け、博士論文の資料収集の為、モスクワでの研究活動を行ったので以下その成果について報告したい。

本報告者の博士論文のテーマは、初期ボリシェヴィキが建設を試みた集団主義世界におけるセクシュアリティの位置と、またそのユートピア的世界への女性の動員（と排除）の過程を明らかにすることにある。今回のモスクワ出張では、その一環として19～20世紀の転換期に議論された女性問題に関する言説の調査、特に1908年開催の「第一回全ロシア女性会議」についての一次資料の収集を目的としていた。渡航前に当時刊行されていた雑誌について下調べを行った結果、モスクワの「ロシア国立図書館（レーニン図書館）」に、女性問題にコミットした雑誌が複数所蔵されていることを把握した。よって滞在期間中は専ら同図書館にて毎日資料収集を行ったが、とりわけ雑誌「Женский вестник（女性通報）」の中に多くの資料を発見できたといえる。この雑誌は1908年の会議の主催者でもある女医パクロフスカヤが編集したものであり、彼女による詳細な会議報告が掲載されていたのは勿論のこと、その他にも大小の多様なテーマの会議や当時のフェミニズム運動の動向を知らせる記事があり、併せて資料として持ち帰ることができた。

当初の予定よりも早く上記の目的が達せられたので、残りの期間は1914年より刊行された雑誌「Работница（労働者婦人）」（1915年に一時中断、1917年に再度刊行）を1929年発行分まで閲覧・調査した。因みにこの雑誌は、今年100周年を迎える老舗大衆誌であるが、当時は社会問題に関する評論や詩や小説等の文学作品の他、反宗教プロパガンダ、女性党員の紹介、最新の科学の紹介など、大衆女性の幅広い啓蒙を主眼としていたようである。博論では、共産社会への女性動員の装置として「国際婦人デー」が如何に利用されていたかについて言及する予定である為、婦人デーにまつわる記事を中心に調査した。さらに閲覧する過程で散見されるローザ・ルクセンブルグに関する記事に興味を抱いた。ローザに捧げる詩作品、また彼女の名を冠した保育所や工場などが次々に作られていったようだが、革命のアイコンとしての「ローザ・ルクセンブルグ」というテーマについても今後検討してみたい。

今回の調査を振り返ると、過去数回のモスクワでの研究と比較しても非常にスムーズに作業ができた。これはレーニン図書館の利便性がここ数年で著しく改善されたことによる。例えば、いまや館内では無料のwifiが使用できるし、近年設置された検索端末も非常に使いやすい。また以前は禁止されていたかばん類の持込が許可されている上、何より複製した資料がフラッシュメモリに保存して持ち帰ることができるのは、報告者のような外国人研究者にとって非常にありがたかった。

また資料調査以外においても、来年度開かれる国際学会において共同でパネルを組織する予定のロシア人大学院生と協議する時間も持つことができた。このような実り多き研究の機会を提供してくれた「卓越した大学院拠点形成支援補助金」に感謝申しあげたい。